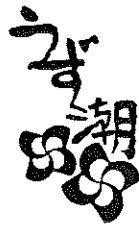


仕事柄、人類と感染症のかかわりについて考えることが多い。

カリフォルニア大学の人類学者が、ネバダ州の洞窟で行った調査研究がある。調査は、先史時代住民の残した糞石(ふんせき)を対象としたもの。糞石は動物や人間の排せつ物である糞が化石化したものを指す。花粉や寄生虫といった糞石中の内容を分析することにより、当時の食生活や人々の健康状態を推測することを可能にさせる考古学的資料である。

糞石研究は土壌酸性度が低い新大陸アメリカにおいて発展した。日本のような酸性土壌では糞石のような有機物は残存しにくいのである。結果からいえば、米国先住民の残した糞石からは寄生虫の卵



やまもと たろう  
山本 太郎

先史住民の健康

付けた。小集団で絶えず移動していた狩猟採取社会の人々は、定住した大集団より糞便などからの再感染の機会は少なかったことは容易に想像できる。

先史住民が消化管寄生虫に無縁の生活を送っていた可能性があるという仮説は、アメリカ先住民たちの間で花菜(アカザ)が食されていたという事実によって補強された。花菜は、荒地などにも生え

では現在でも駆虫薬として使用されている。

この例からだけで結論付けることは難しいが、先史時代住民の健康状態が、それほど劣悪でなかったことの一つの証拠といえるかもしれない。

一方、この例は、先史時代においてさえ疾病に関連する人々の行動に適応的傾向があったことを示す。霊長類を対象に自己治療行動を研究している専門家によれば、同様の適応的行動をチンパンジーやゴリラのなかにも見つけることができるという。高等霊長類に共通するこうした適応的行動、進化の古い時代において遺伝子に組み込まれた行動だと考えると興味深い。(長崎大熱帯医学研究所教授)

も幼虫も発見されなかった。

このことから人類学者は、先史住民が消化管寄生虫に無縁の生活を送っていた可能性があると結論

る一年草。若葉は紅紫色に染まり、芽の芯が赤いところからこの名が付けられた。寄生虫駆虫薬として作用することが知られ、メキシコ